

開かれた窓としてのバラエティ番組
～ 井原高忠が開いた「窓」～

Variety programs as opened windows
～The "window" opened by Takatada Ihara～

2015年3月

鈴木 常恭

テレビ番組研究『開かれた窓としてのバラエティ番組』

～ 井原高忠が開いた「窓」～

Variety programs as opened windows

～The “window” opened by Takatada Ihara～

鈴木 常恭

SUZUKI Tsuneyasu

【概要】

近年、テレビのメディアで占める位置が凋落していることを、喧しく語られることが多くなっている。これは後発メディアのインターネットによるコンテンツ、パーソナルなメディアとしての伸長によってその場を奪われている感がある。また、スマートフォンなどのモバイルメディアによるSNSなど多様なコンテンツの大衆化にも起因していると考えられる。

では、本当にテレビの役割は終わってしまったのだろうか。

2014年初秋、テレビ草創期から番組制作に関わり、それぞれのジャンルの確立を担った二人の制作者が逝った。一人はドラマ制作者の大山勝美氏、そして、バラエティの井原高忠氏である。

彼らの姿勢は「メディアの雄」を担う矜持で満ち、真摯であった。本稿において我が国テレビの「音楽バラエティ」のジャンルを開拓した井原高忠氏の業績を叙述し、いかにコンテンツ（番組）としての「音楽バラエティ」への「窓」が開かれかたかを考察する。

なお、筆者はこれまで番組研究として「ドキュメンタリー」「クイズ」がいかにしてジャンルとして確立されたかをテレビ草創期から書いてきた。本稿もこの延長上にあるもので、いかにして開発され視聴者が受容することになったかの研究の一環である。

キーワード

バラエティ、窓。井原高忠、演出、構成

[Overview]

In recent years, it has become frequently and widely said that the position held by television-based media has fallen into a decline. It seems that this position has been taken over by the growth of the Internet, a latecomer in the field of media, as content-driven and personalized media has risen. In addition, the spread of various contents such as social networks using smartphones and other mobile media can also be thought to have played a part.

So will the role of television come to an end?

In early fall 2014, two producers who were involved in producing TV shows ever since the birth of television and who carried the weight of establishing their respective genres, passed away. One of them was Mr. Ohyama Katsumi, a producer of dramas, and the other was Mr. Takatada Ihara, a producer of variety shows.

They carried themselves as "media giants" with much pride and sincerity. This paper describes the achievements of Mr. Takatada Ihara, who pioneered the "music variety" genre in Japanese television, and examines how the "window" was opened to "music variety" as a form of content (TV programming).

The author has conducted prior research on Japanese television programs regarding how "documentaries" and "quiz shows" became established genres, since the early days of television. This paper is an extension of the research, and looks into how television programs were developed and received by audiences.

Keywords

Variety, Window, Takatada Ihara, Production, Structure

1. はじめに

2013年（平成25年）2月1日は、我が国でテレビの本放送が日本放送協会（NHK）によって始まって60年にあたる。1953年（昭和28年）2月1日当時の古垣徹郎日本放送協会会長は放送開始にあたり以下のように開局の挨拶を行っている。

「テレビは文化のバロメーターだと言われています。しかも、目と耳を同時に引き付けて各家庭に流れるテレビジョンは、その影響するところは国民生活全体の上に革命的とも申すべき大きな働きを持つものであります。私どもはテレビジョンを一日も速やかに我が国全土に及ぼし、国民等しくその利益を受けられますようにあらゆる工夫と努力を傾けまして、ご期待に沿いたいと存じます」

半年後の8月28日に我が国初の民間テレビ局日本テレビ放送網（以下日本テレビと記す）が開局した。この時からテレビはニューメディアの雄に躍り出た。しかし、受像機は800台余りであった。その受像器は当時の国民の可処分所得の何倍もするものであった。ちなみに、翌年東京放送（現TBS）が関東エリアで開局している。

1956年（昭和31年）7月の「経済白書」が「もはや『戦後』ではない」と記したころから一般家庭でも受像機を買えるようになった。このことによりテレビは「街頭」という「公共空間」から「居間」という「私的空間」へ移転が始まったことなる。この光景を山崎貴監督作品「Always～三丁目の夕日～」（2005年公開）が活写している。

2. 「窓は開かれた」



①

①読売新聞1958年（昭和33年）12月2日朝刊

②

②『「美智子さま」還暦記念写真集』朝日新聞編1994年

③

③「正田邸2階の窓から手を振る美智子さま」

2014年（平成26年）4月13日 BS フジ「皇室のこころ2014春」より

ここに掲げた3葉の画像は、1958年（昭和33年）12月1日の東京五反田の池田山の正田邸の光景である。①の画像は、宮内庁から11月27日に発表され当時の皇太子（現天皇）が民間から妃殿下を迎えることになり、「町から生まれたプリンセス」を祝う地元の東五反田の二千人の人々が提灯を手にして行列を行った光景を記録したものである。②の画像は、地元の人々の祝福を当時の正田美智子（現皇后）さんが、自宅洋館二階の窓を開けて人々に手を振り答える光景を報じた記事である。③はテレビのニュース映像である。正田家の「窓」を美智子さんが自ら開けられ、提灯を持ち手を振られている様相の一部始終を報じた画像である。

この光景をみてある編集者が「皇室の窓が開かれた」と言ったということが伝えられている。それは、この「窓」から我が国の皇室が皇族から妃を迎える旧来の「風」でなく、民間から初めて妃を迎えることで新たな「風」が入ったことを言ったものであろう。まさに、これらの画像がこのことを象徴する光景であることは疑いがない。

1958年（昭和33年）12月1日の正田邸二階の「窓」が開いたことが象徴している。

そして、1958年（昭和33年）の皇太子（現天皇）の婚約発表から翌年4月10日のご成婚にかけ「パレードを家庭で観たい」という願望から、一般家庭のテレビ保有台数は一気に伸び、NHKの受信契約は200万件となった。それは、先に書いたように1956年（昭和31年）の経済白書に記述された戦後復興が終わり、続く高度成長期の狭間であったが、テレビは私的空間で保持されることによって「社会への窓」の役割を明確に担うことを意味した。

3. バラエティ番組とは

今日テレビ番組表を見ると「バラエティ番組」が席捲している。このことが「いま」のテレビ状況の評価を落としているように思える。多くの番組で「バラエティ」という語を冠している。それは報道番組、科学番組にも報道バラエティ、科学バラエティと称し「バラエティ」の要素を含んだコンテンツとして成立させられている。

「バラエティ」とは、「様々の異なったものの寄せ集め」と辞書に記されている。我が国の多くの芸能は、この要素で構成されている。歌舞伎にその典型例をみることができる。芝居、謡い、舞踊で構成されている。また、寄席においても噺、音曲（歌、三味線、太鼓等）、舞踏、浪曲、曲芸（神楽など）で構成され、これらの要素はいまも継承されている。

アメリカをみるとスタンドアップコメディを中心に展開される「ボードビルショー」がこれにあたり、後にブロードウェイで隆盛を極める「ミュージカル」に変化していくことにみることができる。

このようにバラエティの構成要素は、「歌舞音曲」が中核となっていることが分かる。

以下の画像は1953年（昭和28年）8月29日の毎日新聞朝刊のラジオ・テレビ欄である。開局2日の日本テレビの12時の欄に「ヴァラエティ『歌って踊ってテレビにのって』奥田宗広と楽団・・・」と記され、「ヴァラエティ（バラエティ）」という表記を既に使っている。しかし、この番組表を文献などから察すると前述した「バラエティ」と乖離しているものと考えることが妥当であろう。いわゆる、単なる「音楽番組」でスタジオに歌手と楽団を羅列し、歌手はバンドを背にしてマイクの前で歌唱するだけであった。現在、私たちが観ているようなテレビ画面の構図へのこだわりを感じることができないと、井原高忠も著述を担当した「ヴァラエティ・ミュージカルの演技」（昭和35年）で同じような見解を記している。すなわち、テレビ演出がないことを喝破しているのである。

11:55 番組予告
0:0 ヴァラエティ『歌って踊ってテレビにのって』奥田宗広と楽団歌中村哲他
30 NTVニュース

毎日新聞 昭和28年8月29日朝刊

では、テレビにおける「バラエティ」とは、どのようなものを言うのであろうか。

井原は「バラエティというのは、一番日本人が不得意なものなの。作るということより、見ることが、バラエティの真髄というのは、意表をついた配列にあるのです。要するに思いもよらないものを並べて行って、それが面白い、成功した、というときにいいバラエティであるということが言える。」と言っている。

以下、この考え方を実践して我が国の「音楽バラエティ」の「窓」を開いた元日本テレビプロデューサー井原高忠の『光子の窓』をみていくことにする。

4. バラエティの「窓」が開いた

あの正田邸の洋館の「窓」が開く約半年前、テレビでも「窓」が開かれ、私的空間の本拠地「居間」に新しい「風」が送り込まれた。

日本テレビ	
8:00	20:30 週間ニュース伝説
9:00	20:15 世界めぐり「インド」
9:55	映画「火の海」(日活作品)
10:00	20:15 ひっくり餅伝説
10:45	0区横丁に旗揚げ米金伝説
11:15	松坂武将百年祭「国務院執行初々松坂院慶百年
3:00	大相撲八日 解説五ツ島他
0	0 牧野り大学 サトウハチロー他
30	30 ショー「光子の窓」●草田光子、山田真二、長島茂雄、榎本明美他
0	0 若原天國「帰って来たばば」三木のり平、八枝むと吉他
30	30 紅あざみ「父と子」伊藤雄之助他
0	0 プロ野球中継(中日対阪神)「中日対巨人」宇井アサ、解説 松本尚(両天の窓)「大洋対国鉄」(山崎雄也)
0	0 20:15 映画「フロンティア」(田原) (声)宇野重吉、村瀬正吉他
45	45 映画アワー「死の崖の脱出」
0	0 スポーツニュース05 旗手日記
15	15 海外ニュース030 スポーツ

1958年5月11日土曜日 朝日新聞朝刊

上記の記事は我が国の「音楽バラエティ」が始まることを告げたものである。番組タイトルの横には初回を示す「①」が記されている。しかし、現在のテレビ欄にある新番組開始紹介のコラム欄では取り上げられていない。

それは、昭和33年5月11日(土曜日)午後6時30分ブラウン管に木の葉越しのモダンな洋風の窓が映し出される。そして、次のような歌が始まる。

『窓を開けましょう
花の香りが
あなたのほほえみを
運んでくる
夢を語りましょう
甘いリズムが
あなたの思いを
かなえてくれる』



「光子の窓」(左下回顧番組での再現)

このような歌声が窓越しに聞こえてくる。そして窓が左右に開くと歌っている草笛光子のウェスト・ショットが映し出される。

これが我が国の本格的な「音楽バラエティ」の「光子の窓」の始まりである。

井原は、草笛光子が音楽に乗せて「窓」を開け「バラエティ」という新しい爽やかな「風」を視聴者の家庭に吹き込んだことになる。

5. いかにして「光子の窓」作られたのか

「光子の窓」は、当時日本テレビで新進のプロデューサーでありディレクターであった井原高忠(後に第一制作局長を務める)が、当時アメリカのCBSで毎週水曜日午後8時から一時間のミュージカル・バラエティとして放送されていた「ペリー・コモ・ショー」を範としたと言われている。

昭和30年代前半には、いまのようにVTRはまだ無く、アメリカの番組を見るためには、放送されている番組をフィルムに一旦撮影しなければならなかった。このようなものを「キネコ(Kineco)」といい、これをアメリカから取り寄せなければ観ることができない状況であった。井原はキネコで「ペリー・コモ・ショー」をみて「ペリー・コモは魅力的なおしゃべりで雰囲気盛り上げ、甘い美声で歌を聴かせていた。愛嬌たっぷりの表情で、愉快的な会話、それに出演しているゲスト・スターの巧みなさばき方などは素晴らしかった。こんなミュージカル・ショーのよさを取り入れたテレビ番組を日本でもぜひやりたいものだ」と野心を語っている。

井原自身の著書『元祖テレビ屋大奮戦記!』で「僕にはひとつ、テレビに対する考え方があって、新しい視聴者を開拓するんだ、という大義名分を持っていた」と書いている。

「光子の窓」が始まるまでの多くの音楽番組は、番組制作者の経験したものや趣味でやっているものが中心となっていた。このような状況の中で井原は、音楽ファン以外の人にも音楽番組を見せたいと言う願いからコメディやおもしろいことをやる人を入れていくことになった。このような思いが、井原が音楽バラエティ・ショーに傾斜していくことになったと理由と考えることができる。

6. 「光子の窓」の出現の意味

「光子の窓」は、歌とダンス、トーク、コメディ（コント）の要素で構成されている。すなわち、「歌舞音曲」で構成されていることになる。

草笛光子が起用されたのは、この番組の構成要素のキーとなる「歌・ダンス・演技」と三拍子を持ち合わせていたからであったと思う。また、「光子の窓」のタイトルスーパーに「花椿アワー」とクライアントの化粧品メーカー「資生堂」のキャッチコピーが冠せられていことから「おしゃれで、明るく、誰にでも愛される」キャラクターを持っていることから起用されたと考えるのが妥当であろう。

番組展開は、全体に流動感に溢れ、ダイナミックで生き生きとしたダンス・シーンが重要な要素となっていた。そのため井原は「日本はアマチュアばかり、これでは本格的なバラエティー・ショーは無理だ。米国には本物のプロがいっぱいいる。これでなきゃ駄目です。いくら種子をまいたって、土壌が悪ければ芽が出ない。だから、しばらく土壌を作ることから努力をしなければならぬです」と語り、専属のダンスチームを育てることを強く主張した結果が、「浦辺日出夫とスタジオ No.1ダンサーズ」となった。これがダンス・パートを専属で受け持つことになり、この番組で独自のダイナミズムとスピード感を担った。



「光子の窓」ダンス・シーン(回顧番組)

これは、井原が「俺のキャンパスはブラウン管だ、筆はカメラだ、絵具はタレントだ、と、こう思っているわけです」と語り「僕は、どういう絵を描くか決めたときに、じゃあ、こういう絵具を使おう、と思うのであって、この絵具があるからこの絵を描こう、と思っただけのことではない。」という。

「光子の窓」専属のダンスチームを登用することになったのは、このような井原の番組作りの基本姿勢によるものである。

7. 井原がアメリカのバラエティ番組から吸収したもの

井原は、番組が始まって一年後にアメリカに渡り「ペリー・コモ・ショー」をはじめ「ダニー・ケイ・ショー」「エド・サリバン・ショー」とゴールデンタイムを席捲していた番組の現場を見て回った。そこで井原は多くのものを修得。斬新なカメラワークや衣裳の

早替わりを目の当たりにし、日本に帰った井原は、「光子の窓」を場面の切り替えのテンポを早くし、登場人物のファッションを思い切っておしゃれにした。

それまでの「光子の窓」は、従来の音楽ショーと同じように固定されたセット前（いわゆる「板付き」）で歌手やダンサーが歌い踊るという手法の演出がなされていた。

帰国後の井原は、美術セットを「引き枠」に載せ展開に併せて移動させ、カメラはドリーを多用し、かつまた出演者たちには、フレームイン・アウトなどより動的な演出を要求することで番組全体に躍動感を醸しだし、より斬新な番組に変容し後のバラエティ番組の範となった。

井原がアメリカで修得してきた演出技法は、単に我が国のバラエティというテレビ関係者のみに影響を与えたと見ることは、狭い見方でないだろうか。すなわち、「光子の窓」で井原は、アメリカのショウ・ビジネスの「風」を日本の茶の間に吹き込もうとした。それを、この番組のオープニングが象徴していると考えることができないだろうか。

井原は、「光子の窓」の構成を振り返って次のように語った「この番組の特徴は、歌とダンス、トーク、コメディとあらゆる要素が詰まっているにもかかわらず、器として美しくまとめ上げた点にあると思います。つくるときにイメージしたのは幅広い層が読める雑誌。草笛光子が「窓」を開けるオープニングが表紙・トビラで、グラビアから入って、なかほどに対談や漫画がある。カバーガールを起用する発想も雑誌づくりの発想ですね。」とアメリカでみた番組構成法を語り、それを実践している。

これは、先に記したように音楽ファン以外の視聴者にも観てもらおうことを意図していることから当然の構成と考えることができる。

ちなみに、この番組構成法は、井原の手になり後にヒット番組となった「11PM」「ゲバゲバ90分」にも継承されていることをみることができる。

タイトルについては、「草笛光子が窓を開けて始まるから『光子の窓』であり、ヒットすれば「いいタイトルですね」となるのだから、あまり神経質に（タイトルについて）考えることはない」と語り、番組タイトルは、番組が評価されることで必然的に馴染んでいくものであることを端的に語っている。

8. 「音楽バラエティ」はいかにして確立したか

井原は、「ペリー・コモ・ショー」と同じようにゲスト・タレントや脚本・構成者に一流の人を招聘し、芸そのものを大事にし、品格を落とさないことに注意を払っていた。これは、当時の語りの名手の徳川夢声、落語の古今亭志ん生そしてプロ野球の長嶋茂雄などを出演させていたことにこのことをみることができる。

井原が日本テレビを退職した後、フリーランスの演出家、プロデューサーをしていた時期、筆者と一緒に仕事をした経験がある。その時、彼の一流を求め、品性・品格を求める姿勢を目の当たりにした。井原は、どんな時でもキチッと襟を正し、背を伸ばして指示を出していたことを思い出す。

以下に示す画像は、「光子の窓」の台本である。



(「光子の窓」回顧番組より)

井原は先に記したように「バンド演奏の前で歌手が歌うのを、カメラが撮ってブラウン管に写して見せる音楽番組にあきたらなくなった。もともと絵が好きだったので、思い切って、画面をグラフィックな構成にして、音楽番組に映像美を出すことから始めた。しかし、舞台ショーのようなテレビ番組を作りたくなり、これまでテレビでやってきた音楽番組の集大成として日本に今までなかったバラエティー・ショーをつくろうと考えた、そこで、構成者だった岡田憲和先輩の相談した」と語り、劇作家であり舞台演出家の菊田一夫の弟子であった岡田に相談し、そのもとに集まったのが三木鮎郎、キノトール、矢代静一、永六輔、小林信彦などであった。

脚本家の書いたシナリオを出演者がアドリブで替えることを井原は認めなかった。このことから制作スケジュールは過密であった。木曜に録音が12時から15時、金曜にリハーサルが12時から18時、土曜は本読みが11時から、リハーサルが12時から15時、日曜は立ち稽古が12時から14時30分と15時30分から17時30分、本番が18時15分からであったという記録が残っている。

これは井原が本物を目指し、一流になることを到達点としている姿勢をみることができる証左でないだろうか。

9. 井原が開けた「窓」

ここまで井原高忠が始めた「光子の窓」を通して「音楽バラエティ」を考察してきた。「光子の窓」のオープニングで「バラエティ番組」は開かれたのである。その「窓」はテレビ制作者に対してだけでなく茶の間にも「新鮮な風」を吹き込んだのである。

テレビ放送開始から昭和30年代前半までは、我が国のテレビ界の制作能力が低く、全ての番組を自社内で制作することが困難な状況であった。

アメリカで放送されていたスタンドアップ・コメディの「アイラブ・ルーシー」(NHK)やホーム・ドラマ「パパは何でも知っている」(日本テレビ)に代表される番組を買い付けて放送をしていた。

ここに挙げた番組は、アメリカの中流家庭の人々の生活を描いたものであった。リビングルームやキッチンでドラマが展開していた。そこには、大型テレビ、電気冷蔵庫、ルー

ムクーラー、リビングセットなどが置かれ当時の我が国の家庭と比べると格段に進歩しているセットで展開されていた。

先に記したように1956年（昭和31年）の「経済白書」で「戦後は終わった」と記述されても、多くの人々はこのことを実感できていなかった。そのような中、ブラウン管を通して見るアメリカの家庭生活は、日本の視聴者にとってまさに憧れの生活と映っていた。テレビメディアは、アメリカの生活を伝える「窓」となっていたということになる。

すなわち、視聴者はこの窓から自分たちの生活の未来像を描くための情報を得ていたのである。まさに、この時期テレビは「社会の開かれた窓」の役割を担っていたことになる。

そのような中で「光子の窓」は、アメリカのエンターテインメントを井原が、翻案して日曜日の夕方に茶の間に届けていたのである。井原がエンターテインメント・バラエティを通してアメリカ文化を伝えるために「窓」を開けた意義は、大きいと考えることができる。

そして、1958年（昭和38年）5月11日「光子の窓」開始から6ヶ月後の皇太子（現天皇）の婚約発表の時、後の妃殿下になる正田美智子さんが自宅の二階の窓を開けた光景と符合しないだろうか。

10. 井原が追い求めた「五つの大切」

井原は、先に引用した『元祖テレビ屋大奮戦！』を31年前に出版している。この著作は、3人の若者に対して自らのテレビ人としての歩みを語り、リライトしたものである。文体は、井原の日頃の語り口である辛辣であり諧謔に満ちたもので、彼を知る人には目の前にいるかのようなようである。

「終章」は「現在のテレビに言いたいこと」として「井原高忠五つの大切」としてテレビ番組作りのモットーを記している。少し長いが引用する。

「その一は「恐い」ということ。恐いということは、スリリングということですね。だから、本当に恐くしなくてもいい。スリルがあればいい。タイトロップなスリルがあるもの、緊張感があるもの。

その反対に「可愛い」というものも絶対に必要だと思う。愛らしいこと、ビューティフルなこと。それから「不思議だ」、「なぜだろう」というのが必要だね。四つ目は「おかしい」ということ。「ユーモラス」でもいいんですけどね。

一番最後は「感動的」ってこと。これはエキサイティングという意味でいいんですけど、感動的っていう要素が絶対に必要だね。」

井原の演出家としてプロデューサーとして、後に制作局長として関わった番組をみるとこの「五つの大切」で満たされている。筆者が一緒に番組作りに参画したとき、企画段階からこの「五つの大切」を熱く語っていたことを思い出す。

「五つの大切」は、テレビ番組の編成、制作全体に必要な要素である。テレビの役割についての疑義が喧しく、テレビ制作者が自信を喪失している感がある「いま」、井原が言った「五つの大切」に真摯に耳を傾けるべきではないだろうか。

11. 結語

本稿を書きながら筆者は、1980年代はじめに井原に出会い、番組作りをしたときの様々なシーンを思い出した。また、書き進めるなかで井原に引き合わせてくれた先輩プロデューサーと話し合った。その多くは「井原さんがテレビに求めたものは、何だったのか」であった。

当初、筆者は井原を「音楽バラエティ」を確立した人物として位置付けた。しかし、井原がテレビでやってきたことは、自ら言っているように「ともかく新しい視聴者層を開拓するんだ」であった。それは、「光子の窓」以降の井原の関わった番組をみれば明白である。その業績は単に番組のジャンル開発というだけではなく時間帯の開発を挙げることができる。

1965年（昭和40年）に当時のテレビ界は、早朝と夜遅くは「捨てる時間帯」と言われていた。井原は、自分の番組を成り立たせるために午後11時から「11PM」という新たなバラエティ・ショーの放送を始めた、この番組は、その後の24時間放送の先鞭をつけたことになった。

井原がテレビでやりたかったことは、バラエティとかドラマというそれぞれのジャンルを確立させることではなく、自著「元祖テレビ屋大奮戦！」でも言っているように根源的な「テレビをやる」と言うことであったのである。

最後に、井原高忠氏は2014年9月14日、享年85で逝去された。心から哀悼を捧げる。

引用文献

- 「テレビ番組事始」（志賀信夫著 NHK 出版 2008年）
- 「20世紀放送史」（日本放送協会編 日本放送出版会 2001年）
- 「元祖テレビ屋大奮戦！」（井原高忠著 文藝春秋社 1983年10月20日）
- 「現代テレビ講座第2巻テレビタレント篇」（内村直也編ダヴィット社 昭和35年6月25日）
- 「テレビ事始 創成期のテレビ番組25年史」（志賀信夫著 NHK 出版2008年）

参照文献

- 「テレビ史ハンドブック」（改訂増補版 自由国民社 1998年）
- 「テレビの黄金時代」（小林信彦著 文春文庫2005年）
- 「映像の先駆者125人の肖像」（志賀信夫著 NHK 出版 2003年3月30日）
- 「毎日新聞」（縮刷版 1953年8月、1958年12月）
- 「読売新聞」（縮刷版 1958年12月）
- 「美智子さま」（朝日新聞編 1994年10月）
- 「皇室のこころ2014春」（BS フジ2014年4月13日放送）
- 「The Chronicle 戦後日本の70年③1955-59 豊かさ求めて」（共同通信社 2014年12月3日）